

2023年度 埼玉医科大学短期大学
学校推薦型選抜 B日程
小 論 文 (看護学科)

無断転載・複製を禁ず

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「結婚しなくてもよい」「子どもをもたなくてもよい」と、これまでの当たり前をくつがえす意見が若い女性を中心にみられたが、結婚にまつわることでもう1つ、従来とは異なる兆しが見られたものがある。それは夫婦の名字についての考え方である。

現在の民法（750条）では、結婚した場合、夫または妻の名字を名のることが決められている。夫婦は同じ名字を名のらなければならないが、どちらの名字でもかまわない。しかし実際には、結婚したほとんど（98%）の夫婦が夫の名字を名のっている。

では人々は夫婦の名字についてどのように考えているのだろうか。調査では、4つの選択肢の中から1つを選んでもらった。

- 1 当然、妻が名字を改めて、夫のほうの名字を名のるべきだ〈当然、夫の姓〉
- 2 現状では、妻が名字を改めて、夫のほうの名字を名のったほうがよい〈現状では夫の姓〉
- 3 夫婦は同じ名字を名のるべきだが、どちらが名字を改めてもよい〈どちらが改めてもよい〉
- 4 わざわざ一方に合わせる必要はなく、夫と妻は別々の名字のままよい〈別姓でよい〉

国民全体の結果では、意識のうえでも、結婚した男女の名字については、この25年間一貫して〈当然、夫の姓〉が最も多い。ただし、この〈当然、夫の姓〉は1988年調査以降減少しており、さらに〈現状では夫の姓〉もこの5年間で減少している。この2つはどちらも、結婚したら女性が改姓することを肯定する考え方で、減少したとはいえ98年調査では半数以上を占めている。一方、〈どちらが改めてもよい〉はここ10年で増加し、今回〈現状では夫の姓〉を上回った。

（中略）

日本で夫婦同姓（同氏）が定められたのは明治民法で、姓（氏）は「家」の名称とされ、嫁入りして夫の家の一員となった妻は夫の家の姓（氏）を称するとされていた。一方、戦後民法では「家」制度は否定され、姓（氏）は個人の呼称の一部という色彩が強くなった。しかし、現在でも名字は「家」の影を引きずっている。

NHK「家族についての世論調査」（1997年 全国16歳以上）で、名字とはどういうものかと思うかを尋ねたところ、「代々受け継がれてきた名前」が最も多く51%を占めており、「個人を表す名前の一部」は28%、「夫婦を中心にした家族の名前」19%となっている。年層別にみると、40代以下では「個人をあらわす名前の一部」が3割を超えるものの、各年層とも「代々受け継がれてきた名前」が4割以上と多数派で、名字は先祖代々受け継いできた「家」の名前と思われている。ただし、20代、30代、40代という比較的若い人たちでは男性より女性の方が「家」の名前と思う人が少なく、男女で名字に対する考え方のちがいがみられる。

（『現代日本人の意識構造 [第5版]』 NHK放送文化研究所 [編] より一部改変）

問1 上記は、NHK放送文化研究所が1973年以降5年ごとに調査した「日本人の意識」の、6回目となった1998年の調査結果を分析して、2000年に出版した文章の「改姓」に関する部分である。この「改姓」についての本文の内容を150字以内にまとめなさい。

問2 この文章を踏まえて、「夫婦別姓」に関するあなたの意見を300字以内で述べなさい。

無断転載・複製を禁ず